

## ボランティアは変わるか？

ケアホーム陽風の里 渡辺 正男

このたびの阪神大震災勃発以来やく2ヶ月になろうとしている。被災者の皆さん（筆者の友人、知人、親戚を含めて）にはお見舞いの言葉もないくらいである。直接現地について体験出来ない我々にとってはもっぱらマスコミ報道に頼る外はないが、勃発以来日々明らかにされてきた実態にふれ、非常に多くのことが考えさせられたと思う。そのなかの一つとして、筆者の現在の立場からも身近な問題であるボランティアを取りあげたい。

現在筆者のお預かりしている老人保健施設でも、毎月いろいろのボランティアグループの人々のサービスを頂いており、また学会その他の会合等で、実際にボランティア活動に携わっている方々の多数のお話も伺っている。また筆者の身近なところでの、視聴覚障害者に対するボランティア活動も見聞きしてきた。これらを通じて、日本のボランティア活動に対する一定のイメージが与えられるようになった。第一には活動の当事者達は極めて熱心である。第二には組織としては、一部には民間もあるが行政主導型が多いのではないかと、第三には活動の当事者は一般に主婦であり、社会的に偏りがある、等々である。

翻ってここで一つ紹介したいことがある。それは筆者のアメリカ留学時に受けたアメリカ市民のボランティア活動である。留学したのは今からやく30年以上前の1961年から2年間であり、帰国したのはケネディ大統領暗殺の直後であった。留学先はアメリカ中西部にあるクリーブランド市である。我々の受けた

ボランティアサービスは当時のアメリカ在住の日本人留学生は殆ど同様に受けていたと聞いている。主として種々の市民の家庭への招待であった。楽しい思い出をたどってみると、フォード自動車のディーラーの老夫妻には何度も招待され、クリーブランド郊外の住宅地にある町の市長選挙の候補者宅での政見勉強会への招待、ユダヤ教徒家庭での宗教的雰囲気体験、その他中流と思われるサラリーマン家庭、一人暮らしの老婦人の英会話教室等である。これらは全てボランティアグループのメンバーである。これはアメリカ国内のボランティア活動のほんの一部に過ぎないことを考えると、当時の日本、或いは現在までの日本の現状と比較して思い半ばにすぎることがある。

ところで、本題は今回の阪神大震災におけるボランティア活動である。毎日のマスコミ報道から受けた印象を一言で言うと、まことに眼を見張るものであった。そのいくつかの特徴と思われるものを挙げると、第一に、若者の活躍である。次には自発性であり、震災発生と同時に全国にほうはいとして沸き上がった。テレビでみた地震後の火災は恐るべきものであったが、その後の日本全国のボランティアの火の手もあの火災にも劣らないものであったと思うのである。さらに次の特徴としては、今回のボランティア活動には、職能別の組織化が始まったと思われる。医療活動は当然と思われるが、建築関係の組織的な活動は極めて新鮮に映った。

以上のように見てくると、今回の阪神大震災におけるボランティア活動の経験は我々日本人としては掛け替えのないものであり、この火は決して消してはならないものである。また新たに動き始めた動向の芽もさらに育てて行かなければならないであろう。要するに

日本のボランティア活動はこれを機に、従来の「篤志家の活動」から脱皮するのだろうか。またその対象は勿論災害のみではない。目標はボランティアの普遍化と日常化にあると思う。



アメリカ留学時代（1961年）における、ボランティアによる  
留学生へのホームステイ等の日常的ボランティア活動